

円山派、 応挙に始まる

江戸時代中期およそ十八世紀半ば、京都では流派にとらわれず、画家の個性を尊重し評価するだけの文化的土壌が徐々に整い、それに伴って多くの個性派絵師が登場した。そのうちの一人円山応挙は、狩野派の流れをくむ石田幽汀に師事したが、実物写生の重視、中国の古画や大和絵、さらに当時流入してきたオランダの銅版画や長崎に來航した沈南蘋の画風を学習するなどして、多彩な表現を身につけ人気を博した。応挙の多彩さはそのまま弟子の多彩さにつながり、応門十哲と呼ばれた長沢芦雪や山口素絢などの優れた技量を持った弟子たちが、それぞれに応挙の画風の一面を引き継いで個性を発揮した。応挙は門弟らを率いて、従来狩野派と土佐派が一手に担っていた御所の障壁画揮毫なども行い、宮廷にとっても重要な存在となっていく。応挙のもとからは四条派、森派、原派といった諸流派も生まれ、また京都の他流派の画家たちも多分にその影響を受けた。こうして応挙が編み出した写實的画風は京都画壇を象徴するほどに浸透し、近代へと継承されることとなる。

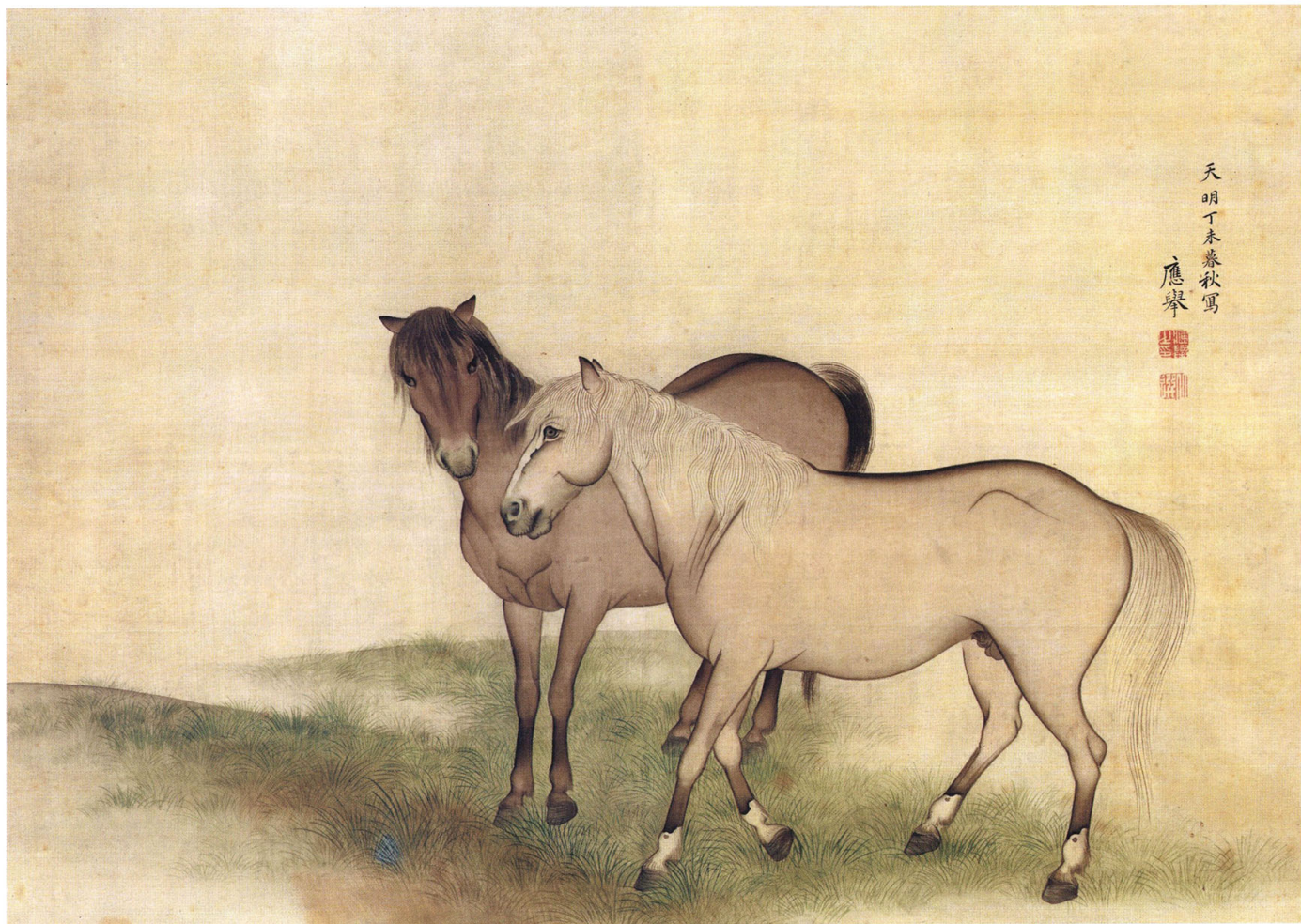


1 海辺図 円山応挙 一幅

紙本淡彩
江戸時代中期(十八世紀)
本紙二三・三三〇・〇

箱蓋表に「海辺図」と記される本図は、小画面の中に、風雪に耐えて岩場に根を張る松樹の間に、山迫る中のわずかな土地に小さな村が描かれ、海に長く細長く突き出した岬の先に夕陽が沈む様を描く。作品として仕上げたも

天明丁未暮秋寫
應舉



のというより、実際に出かけた先での写生をもとに、その場の臨場感を留めるために描きなおしたものの、という感があり、応挙の作品の中では珍しい作品であろう。画面手前には、岩場に激しく打ち寄せる波、岩場で厳しい風雪に耐え続けた松樹、その向こうに穏やかにゆっくりと沈んでいく夕陽を描き、自然の美しさを切り取ったような一場面である。各地に出かけた応挙が旅先で目にした美しい風景の一つなのかもしれない。

本図には、左端上部に8mm角の「応挙」方印が捺されている。この印は殆ど紹介の無いもので、わずかに昭和八年に渡辺二氏が紹介された「円山墨世印譜」(『美術研究』二十一号)に確認ができる。しかし、現存作品においては、この印の紹介を見出せていない。

この作品には特に伝来がなく、箱蓋裏には、江戸期のものと見られる貼紙に、大事なもので外に出さない旨が記されている。こうした状況は、近世期から御所内に伝来した作品に多く、その可能性は特に高いと考えている(コラム16頁参照)。

2 馬之図 円山応挙 一幅

絹本着色

天明七年(一七八七)

本紙五六・二×七八・八

落款より、天明七年(一七八七)、応挙五十五歳の作品であることが判る。この年、応挙は、三月に南禅寺帰雲院の障壁画を、また夏には金刀比羅宮の襖絵を描き、さらに十二月には生涯のうちでも重要な仕事となった大乘寺(兵庫県香住町)の襖絵制作を行い、光格天皇の兄である妙法院真仁法親王との交流が急激に盛んになっていった年でもある。応挙は、天明元年の光格天皇即位に際して「牡丹孔雀図屏風」を描いたと伝えられるが、これによってその名声は一層に高まったと考えられ、翌年には京都の文化人等を紹介する『平安人物志』の画家の部の筆頭となり、大寺院、皇室関係の仕事も多くなつて、それらを弟子たちと共に次々とこなしていったと考えられる。

本図は野で睦まじく寄り添う二頭の馬を描き、伸びやかな筆線の中に片ぼかしや付立ての技法を加えて、馬の体躯の立体感を美しく表出している。明治四十年(一九〇七)、嘉仁親王(後の大正天皇)が九州四国行啓の折に、島津家より献上された作品である。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に¹出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

描き継ぐ日本美 — 円山派の伝統と発展

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 59

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十四年九月十五日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections